

の詩人の童話における代表作である。戦後の混乱した世相の中から、子どもたちが未来への光明を見いだして築立っていくこの一編の童話は、「ア・キラキラ」ということばに象徴されて読者の感動を誘う。詩人の戦後の出発を飾るにふさわしい秀作であった。どの童話にも詩的発想を深く内在させて、豊かな詩的精神を流露されているのが特徴的といえる。また感性の奥深くから捉えられた絵画性と音楽性、暗示と象徴性は、與田文学にみられる表現の特色である。六七年、『与田準一全集』が刊行され、全六巻をもって完結、サンケイ児童出版文化賞大賞を受けた。これまでの童謡・詩・童話の主要作品が網羅されており、與田文学の全容を知ることができる。また評論集に『子供への構想』（四一）、『童謡覚書』（四三）、『詩と童話について』（七六）、また長男の言語記録を主にした『幼児の言葉』（四三）、エッセイ集に『赤い鳥・青い鳥』（八〇）がある。全集第五巻のあとがきに「芸術二王（白秋と三重吉）に仕える幸運をえ」たと記してあるように、與田準一は近代児童文学が生み落とした最も正統的な嫡出子であったといえよう。

〔旗・蜂・雲〕^{くも・はち} 與田準一の第一童謡集。一九三三年、アルス刊。挿画恩地孝四郎、棟方志功。序文、北原白秋。二五年六月の「赤い鳥」で始めて活字になった童謡から「近代風景」「コドモノクニ」「チチノキ」

その他に発表した昭和六年までの作品八一編をもって編まれている。序で白秋は與田準一の詩的感性を評して「彼の視角は一ではない。二方にも三方にも眼を向ける。でなければ彼は複眼の感光板をもってゐるらしい」とのべているのは興味深い。

【参考文献】吉田定一「與田準一解説」（一九七八『日本児童文学大系27』 ほんぷ出版）（吉田定一）

萬屋秀雄^{ひやおや} 一九三五（昭10） 文学教育・児童文学研究家。大阪生まれ。大阪学芸大学卒業後、大阪で小学校教員として文学教育・読書指導の実践研究、児童文学の評論研究に取り組む。一九七六年より鳥取大学に移り、教育学部教授。主著に『文学教育の実践』（二九七四）、『現代児童文学の展開』（七六）、『幼児の世界と童話』（八〇）など。（上田信道）

ラ

ライウリー ペネロピ Penelope Lively 一九三三、イカイロ生まれのイギリス人作家。児童文学の創作のほ

か、評論や大人の小説の執筆など活躍は多岐にわたる。ユーモアあふれる『トーマス・ケンプの幽霊』(一九七三)でカーネギー賞を受賞。『The House in Norham Gardens ノーラム・ガーデンの館』(七四)や『時間のぬいめ』(七六)など、現在と過去のかかわりをモチーフにして、生きることの意味を探るといって一貫したテーマを展開している。(早川敦子)

ライトソン パトリシア Patricia Wrightson 一九二一— オーストラリアの女流児童文学作家。教育雑誌「スクール・マガジン」の編集に携わりながら、田舎の子どもたちを描いた『The Crooked Snake へビクラブ』(一九五五)、『The Bumpy Hole “ニヤップの穴”』(五八)を発表。『The Rocks of Honey 蜜の岩』(六〇)では白人の少年が原住民の文化、伝統に目覚めていく姿を描き、『惑星からきた少年』(六五)では宇宙人の目を通して、現代社会をユーモラスに描いている。代表作の一つ『ぼくはレース場の持主だ』(六八)でも知恵遅れの少年の目から見た現実を追求している。評価の高い『星に叫ぶ岩ナルガン』(七三)は原住民の伝説上の精と岩の怪物を現代オーストラリアに登場させ、オーストラリアのファンタジーを確立した。『水の覇者』(七七)、『水の誘い』(七九)、『風の勇士』(八一)は原住民の青年を主人公に、成長、愛、死をテーマにしたハイ・ファンタジーである。(牟田おりえ)

ラウド エノ・M Энo Мартынович Руд 一九二八— ソビエトのエストニア共和国の、代表的児童文学作家。愉快な三人の小人の冒険を描いた三部作の長編童話『Мурта, Подполника и Мохоева Борода マフとやぶれ靴ともじやもじやひげ』で、アンデルセン賞のオナーリストに(一九七四)。作品はロマンと冒険、ファンタジーにあふれ幅広い人気をもつ。『Огни на островах 孤島の灯』(七七)は五人の少年の無人島漂流の話。自伝的作品『Огни в злеменном городе 暗くなったまちの灯』(六七)は全ソ児童文学コンクールの第一位に入った。(服部素子)

羅 英 えい → ルイン

老 舍 ショウオ 一八九八—一九六八 中国の作家。本名舒慶春。北京に生まれ、北京市立師範卒業後、小学校長など教職につく。ロンドンに留学し創作をはじめ。パリなど旅をして帰国途中シンガポールで中学教員となり、児童文学『ニーハオ! 小坡』(一九三四)、童話劇『宝船』(六三年邦訳上演)などを書く。代表作は『四世同堂』三部作(四五—五〇)。ほかに『ちゃんおつうゆえ』(二七)、『駱駝 祥子』(四一)、『ろんしゅい』(五一)など。ユーモア作家として知られた。(水上平吉)

ラーゲルレーヴ セルマ Selma Lagerlöf 一八五八—一九四〇 スウェーデンの作家、児童文学作家。ノルウェー国境に近いヴァルムランド地方で生まれ、高等

師範学校を女性では最初に卒業し教師となった。生涯

を独身で過ごした彼女の作品の大部分は、この故郷が舞台。『ユスタベールリングの伝説』(一八九一)には、中世末のヴァルムランド地方の生活と風習が、酒と情熱に身を持ち崩した主人公のもと牧師を通して描かれている。世界的に有名な『ニルスの不思議な旅』(一九〇六)は、スウェーデンの北から南までの自然と生活が素朴な人間性と善良さの中で描かれ、これによって、児童文学が文学界で市民権を得るようになったといわれている。当時の進歩的女性解放論的潮流とは一線を引き、ロマネスクで感傷的、夢想的な人間の存在や自然への愛を語るものが多い。一九〇九年ノーベル文学賞を受賞。『Jenslem, 1-2 エルサレム』(〇一〇二)、『Liljecronas hem リリエクローナ家』(一一)などがある。

ラジヘル レナート Renato Rascel 一九二一—

イタリアの俳優、児童文学作家。トリノで生まれ、ボードピリアン、ミュージカルの歌手、映画俳優、映画『外套』の演出などを手がけると同時に、児童文学にも深い関心を示し、一九五八年に最初の作品『ちびくろおじさん』を出版した。この煙突掃除夫を主人公にしたユーモラスなクリスマス物語は、子どもたちの人気を博した。ほかに『Renatino non vola la domenica レナティーノさんは、日曜日には飛びません』(一九六〇)

などがある。

(安藤美紀夫)

ラスキン ジョン John Ruskin 一八一九—一九〇〇
イギリス一九世紀の代表的な批評家。絵画論などのほかに、社会主義的な評論も多い。とくに絵本作家グリーナウエーを応援したことで知られる。唯一の児童文学作品に『黄金の川の王さま』(一八五二)は、グリム民話的な作品展開の中に美と愛というテーマと、時代の功利主義批判を織り込む。のち、ラスキンの最初の妻となったエフィーが一二歳の時、憂うつ症に病むラスキンを励まして書かせた作といわれ、イギリスの創作メルヘンの先駆を成す。

(谷本誠剛)

ラダ ヨゼフ Josef Lada 一八八七—一九五七

エコスロバキアの画家、イラストレーター。民話やわらべ唄、詩などの挿絵を多く手がけ、自分でも子ども向けの童話を書いた。また長い間刺繍画家としても貢献している。プラハ近郊のフルシツェという農村の貧しい靴屋の家に生まれ、一九〇一年に室内装飾を学ぶためにプラハに出たが、その後製本術に変更。同時に絵にも興味をもち、〇四年にはじめて雑誌に線画が載った。はっきりした線で輪郭をとった画風はチェコの画家の中でも独特なもので、チェコの農村や生活や風俗をユーモラスに描いた。子ども向けの最初の本は『私のABC』(一九二一)で、その後『黒ねこミケシュのぼうけん』(三四)で成功を収めた。この童話には農村

の生活の知恵や子どもたちの思い出が描かれている。そのほかにも『きつねものがたり』(三七)などがある。ハシエクの『兵士シユヴェイクの冒険』(二二)の挿絵は世界的に有名。四七年国民芸術家の称号を受けた。

(保川亜矢子)

ラチヨフ エウゲーニー・M　Вячеслав Михайлович

Вич Раѳѳ 一九〇六—ソビエトの絵本画家。動物を描かせたら当代一流。とくに民族衣裳を着た動物たちの絵で知られている。ロシア共和国のトムスク市の出身。十月大革命後間もない一九二〇年代初めから絵を学び、三〇年キエフの出版所クリトウーラ的美術部に入る。三〇年代後半からモスクワの児童図書出版所に移り精力的に制作に励み、戦後『*Бабушкины сказки*』(ハシエク)、『*Русские сказки*』(六五)など次々と大作を発表する。ラチヨフの絵の最大の魅力と特長は民族衣裳をつけた動物たちだが、「ただ装飾的に美しく見せるためではなく、その動物の中で民族性を強調し動物が表現しようとしている人間的性格を強調するため」という彼の意図はみごとに生かされている。ラチヨフの絵本は日本でもかなり紹介されているがウクライナ民話『てぶくろ』(五二)が最も知られている。

(内田莉沙子)

ラツカム　アーサー Arthur Rackham　一八六七

一九三九　イギリスの挿絵画家。ロンドンに生まれる。虚弱体質のため学校を中退、友人とオーストラリア周遊旅行ののち、ロンドンの火災保険会社に勤める。仕事のかたわら、ランベス、スレイド両美術学校で絵画の基本勉強を続ける。やがて雑誌「ウェストミンスター・バジェット」のスタッフに加わり、挿絵の仕事に携わるが、その後、本の挿絵の分野でその本領を発揮した。長年独習で研鑽を積んできた線画を基本に、当時の最新技術であった多色刷りの技法を駆使しての制作がはじまる。できあがった作品は、いずれも豪華本となり、手に入れられる人の制限はあったが、収集家の目も惹きつけるみごとに本となった。代表的な作品としては、バリーの『ケンジントン公園のピーター・パン』(一九〇六)、グリム童話集(一九〇〇)、アーヴィングの『リップ・ヴァン・ウィンクル』(〇五)、グレイアムの『たのしい川べ』(四〇)への挿絵がある。

(中野節子)

ら・て・れ　童謡雑誌。都築益世を中心に「らてれの会」が結成され、一九五七年(昭和32)六月に創刊された。「ラジオのら、テレビのら、レコードのら、ら・て・れ」。童謡は、文学としては詩を、形態には音楽を」と創刊号の巻頭にうたわれている。六四年(昭39)、第三号をもって終刊。創立同人には勢メ信義、高田三九三、安藤徇之介、青戸かいち、羽曾部忠、武鹿悦子ら

二〇名。のちに小春久一郎、神沢利子らほか三〇余名が同人に参加。『らてれ代表作品選集』が会から出版されている。
(吉田定二)

ラ・フォンテーヌ ジャン・ド・ジャン・ド・ラ・Fontaine 一六二一―九五 フランスの詩人。シャンパーニュ州シャトーチエリに生まれ、父親と同じ治水営林行政官の職にあつたが財務卿フーケの庇護をも受けた。フーケ失脚後はオルレアン大公妃、晩年はラ・サブリエール夫人、死の直前はデルヴァル夫人の庇護を受け、物質面、精神面で大いに援助を受けた。新旧論争においては古典派に組みしたがその自由自在な詩句は近代派にも受け入れられる素地をもっていた。作品は『コント』(一六六五―七四)と『寓話詩』(一六八―九四)が主たるものである。『寓話詩』はイソップや民話に取材しはしたが、後半には彼独自の人生観やモラルが述べられ、このジャンルの最高傑作と認められるものである。彼が一二巻のその寓話詩を宇宙を舞台の一〇〇幕の劇と称しているように、これは当時のフランス社会の縮図である。
(牧野文子)

ラーマヤナ Ramayana 古代インドの長編叙事詩。七編二万四〇〇〇頌(一頌は二行)からなる英雄ラーマ王子の行状記。作者のヴァールミキはおそらく編者で、前四世紀ごろから二世紀にかけてほぼ現在の型になったといわれる。第一編と第七編のちに附加

されたものでラーマ信仰の宗教性が加味されており、その書物はヒンドゥー教の聖典になっている。コーサラ国ダシユラ王の嫡男ラーマは王位継承の前日、義母の悪だくみに遭い一四年間森に追放される。ランカー島(スリランカ)の魔王ラーヴァナに妻のシータ妃を奪われたラーマが、ハヌマンなど猿軍の救援で激戦の末魔王を殺し、シータを救出して凱旋しコーサラ国王に即位する物語。インド人の理想像として敬愛され現在に語り継がれ、祭りなどで圧倒的人気をもって上演される。古くからアジア各地に伝播しインドネシアではワヤン(影絵芝居)の演目になるほど親しまれているが、日本には漢訳仏典で伝わっているもののそれほど知られていない。子ども向け再話に『ラーマヤナ』(一九五〇)、『少年少女世界文学全集』(一六〇)におさめられたものがある。
(鈴木千蔵)

ラム姉弟 ラムきょうだい Mary Ann Lamb (一七六四―一八四七)・Charles Lamb (一七七五―一八三四) イギリスの作家。弟ラムは詩人・批評家としても知られ、はじめ詩作に没頭していたが、散文やエッセイにも手を染め、とくに『エリア随筆集』(一八二三、三三)は有名。過労のために狂気に陥った姉メアリーの保護者として終生独身を通じた。児童文学の分野では、児童書出版でも名をはせた小説家W・ゴドウィンの勧めで、メアリーとともに『シェイクスピア物語』(〇七)を上梓し、

チャールズは悲劇を担当した。この作品は原作の香りを損なうことなく、シェークスピアの詩的世界を存分に生かすことによつて児童文学史上の記念碑的な著作となつた。姉弟は同じく共同で『レスター先生の学校』(〇八)、『*Poetry for children* 子どものための詩』(〇九)を著した。なお『ユリシーズの冒険』(〇八)はチャールズ独りの手になるものである。(定松 正)

ラールソン Carl Larsson 一八五三—一九一九 スウェーデンの画家。ストックホルムにあるナショナル・ミュージアムのホールを飾るフレスコ画が有名である。ダーラルナ地方の自宅と家庭生活を題材に、温かいタッチで多くの絵を描き、それを一冊にまとめた作品『*Et hem* 家庭』(一八九九)は、今も世界各国で親しまれている。知人の子どもたちの肖像画とエッセイをまとめた『*Andras barn* よその子どもたち』(一九一三)も美しい絵本である。(木村由利子)

蘭郁二郎 いんじくろう 一九二二—四四(大2)昭和19 作家。本名遠藤敏夫。東京三田に生まれ、東京高等工業学校電気科を卒業。一九三五年「探偵文学」創刊とともに同人となり、『夢鬼』を発表した。三八年「シユピオ」の廃刊によつて、科学小説、冒険小説に転じ、『地図にない島』(一九三九)、『脳波操縦士』(四一)などを出版。少年ものには、『地底大陸』(三二)、『海底紳士』(四三)などがある。四四年報道班員として台湾に赴き

飛行機事故で死亡。

(二上洋二)

ラング Andrew Lang 一八四四—一九二二 スコットランド生まれの作家。セント・アンドルース大学を経てオックスフォードに学ぶ。その後ロンドンに出てジャーナリストとなるが、並行して生涯を文筆に打ち込んだ。六八年の生涯で数百冊の著作をもつし、その領域は、詩作、翻訳、昔話や童話の再話、歴史研究、小説執筆と、実に広範囲に及んだ。児童文学の分野でとくに名高いのは、『青色の童話』(一八八九)にはじまる、色のついた童話シリーズである。以後、『赤』(九〇)、『みどり』(九二)、『黄』(九四)と続き、一九一〇年の『ライラック』で完成した。同時にホメロスの『オデュッセイア』(二八七九)、『イーリアス』(八三二)をはじめ多くの古典を翻案再話し、イギリス民俗学会設立(七八)にも尽力した。(三宅忠明)

ランサム アーサー Arthur Ransome 一八八四—一九六七 イギリスの児童文学作家。ヨークシャー生まれ。幼少時から、父親とともに北部の湖水地方へ出かけ、釣りや狩猟を楽しんだ。高校を出てからのち、出版社で働きながら文筆活動をはじめ、ポーやワイルドの評論を書いたり、第一次世界大戦中は、記者として戦地へ赴き、また、ロシアや中国へも精力的に取材に出かけた。忙しい中にも、暇をみつけては、懐しい湖水地方を訪れたランサムは、子どもたちが楽しい休

暇を思う存分過ごす様子を、実にリアルに、生き生きと描き出した。それが、『ツバメ号とアマゾン号』(一九三〇)から『シロクマ号となぞの鳥』(四七)までの一二冊である。六作目の『ツバメ号の伝書バト』(三六)がその年に創設されたカーネギー賞の初の受賞作となった。いわゆる休暇物語に新風をもたらしたこのシリーズには、解放された子どもたちの喜びがあふれている。ありふれた平凡な子どもたちの、日常的な事実を、鋭い観察眼でつぶさに描き、読者に物語の主人公たちと行動をともにしている感を起こさせる。子どもの世界の真実をありのままに描くことの重要さを示し、その後の児童文学に多大な影響を与えた点で、ランサムは一九三〇年代のリアリズムを代表する作家といえる。日本には六〇年ごろから訳出されはじめ、六七年から『アーサー・ランサム全集』全一二巻が刊行された。【参考文献】瀬田貞二・猪熊葉子・神宮輝夫『英米児童文学史』(一九七一 研究社) (谷口由美子)

リ

リア エドワード Edward Lear 一八一二〜一八八
 イギリスのナンセンス詩人、画家。二人姉の二〇番目に生まれ、病氣や父の破産などで屈折した内面をもつようになった。動物細密画から風景画に転じ、生涯独身でイタリア、エジプト、中東などを放浪した。子どもたちに即興の絵と短詩リメリックをつくり、『ナンセンスの本』(一八四六)にまとめたほか、『Toughable Lyrics 滑稽抒情詩集』(七七)など独特の造語を駆使したナンセンス詩や物語やアルファベットの本と旅行記がある。(吉田新一)

李園友 ウリョム 리원우 一九一四〜 朝鮮民主主義
 人民共和国の児童文学作家。平安北道義州郡の生まれ、一九三〇年義州普通学校卒業後、農学校に入る。三二年「プロレタリア児童文学会」結成後、カップの影響下で創作に励む。朝鮮作家同盟中央委員、児童文学分科委員会委員長歴任。代表作に長編童話『斧將軍』(一